

水揚げ日本一の未詳資源フグ類の基礎情報の解明

○北海道のフグ類の漁獲量が全国一位に

フグと言えば山口県下関市が有名ですが、北海道におけるフグ類の漁獲量は 2016 年頃から増加しており、2019 年～2022 年には北海道が全国 1 位となりました（農林水産省海面漁業生産統計調査）。2021 年には全国の漁獲量が 6,172 トンであったのに対し、北海道だけで 1,990 トンと全国の約 30%を占めました（図 1 左）。北海道の漁獲量を地域別に見るとオホーツク海と日本海で増加しており、特にオホーツク海での増加が顕著でした（図 1 右）。これらの統計資料では「フグ類」として集計されており、複数種が含まれます。資源を適切に利用するためには、種類ごとの漁獲状況の把握が必要ですが、これらの資料では把握できません。そこで詳細な漁獲状況を把握するため、主要産地の水揚げデータを収集するとともに令和 6 年に漁獲されたフグ類の種組成を調査しました。

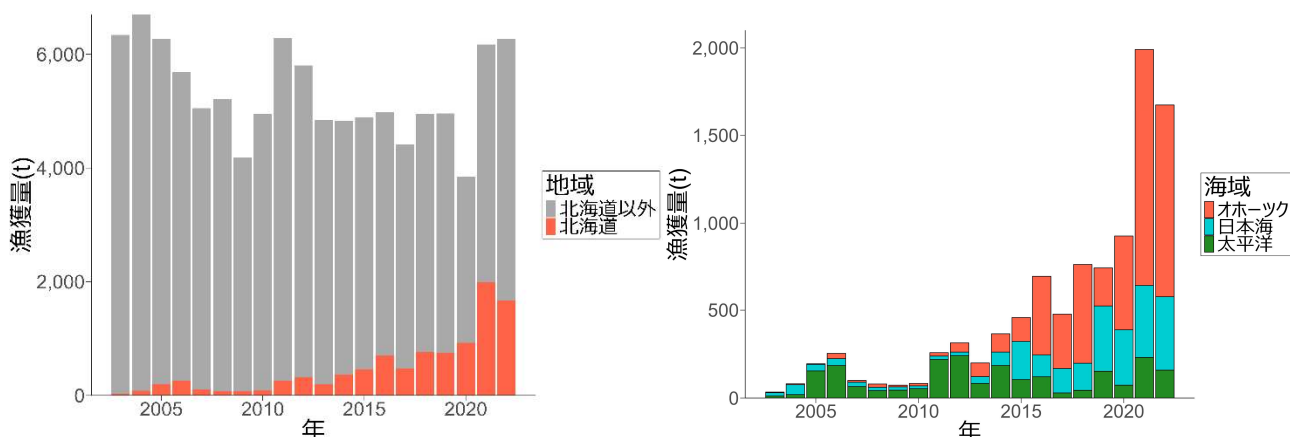


図 1 フグ類の漁獲量年推移（左：全国と北海道 右：北海道全体）

資料：海面漁業生産統計調査（農林水産省）

○増えたのは何フグ？

1983 年に山口県の水産試験場が北海道で行った調査報告では「圧倒的にマフグが多く、次いでトラフグだが量として比較にならない」とされています。しかし、この報告は約 40 年前のものであり、近年増えた種類が何かは分かりません。そこで、急増したフグ類の種組成を調べるために日本海とオホーツク海の漁獲が多い 5 つの漁協において、水揚げデータを調べました。これらの漁協ではフグ類はすべて「ふぐ」という銘柄で水揚げされていましたが、「ふぐ」銘柄のうち、単価が高いトラフグは市場で他のフグと分けて出荷されることが聞き取りにより分かったため、単価の違いによってトラフグの漁獲量を抽出して集計しました。その結果、いずれの漁協もトラフグの漁獲量割合は 1% 以下でした。トラフグ以外のふぐについては令和 6 年の 6 月から 11 月に水揚げされた「ふぐ」銘柄の一部を標本として買い取り、模様やトゲの有無などから種を判別したところ、標本とした 1,173 個体はすべてマフグでした（図 2）。以上から急増しているフグ類はマフグであったと考えられました。

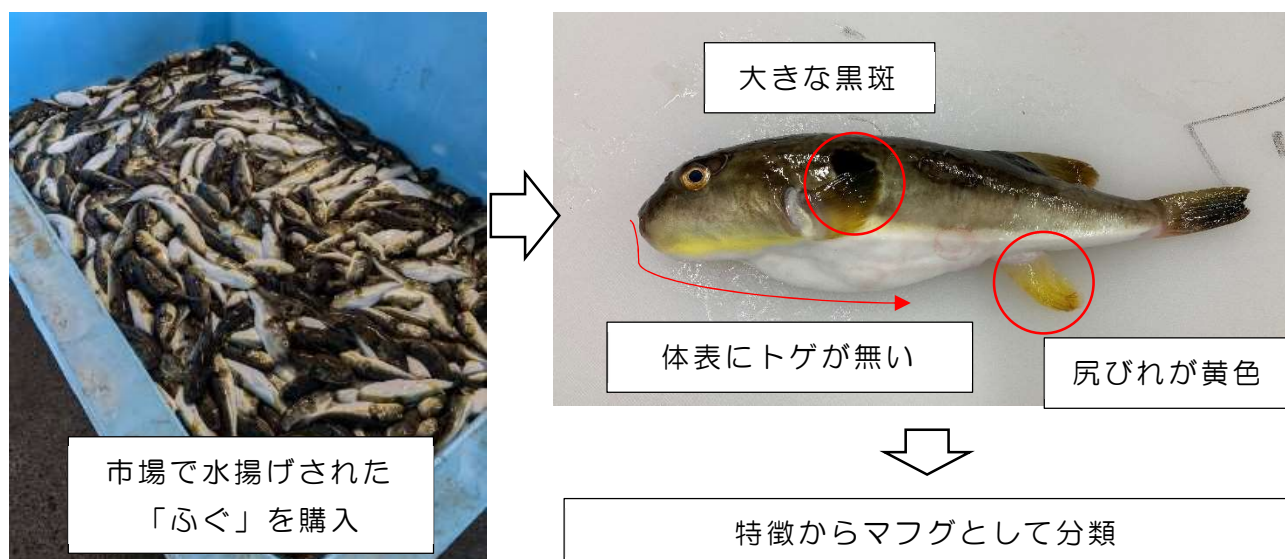


図2 「ふぐ」銘柄の種類分け作業手順

○マフグの漁獲状況

北海道のマフグは日本海では主に大型定置網で、オホーツク海では主に底建網で漁獲されています。収集した水揚げデータから算出した北海道におけるマフグの月別漁獲量を見ると、日本海では6～7月、オホーツク海では10～11月に漁獲が多くなっていました（図3）。また、2021年と2022年の漁獲量を比較するとオホーツク海ではあまり年による変化が見られませんが、日本海では大きく変化していました。オホーツク海では秋の底建網漁業が10月頃から始まり、12月下旬頃まで行われますが、11月下旬頃にフグの漁獲が急減し、12月上旬には途切れることから冬になると別の海域へ移動している可能性があります。

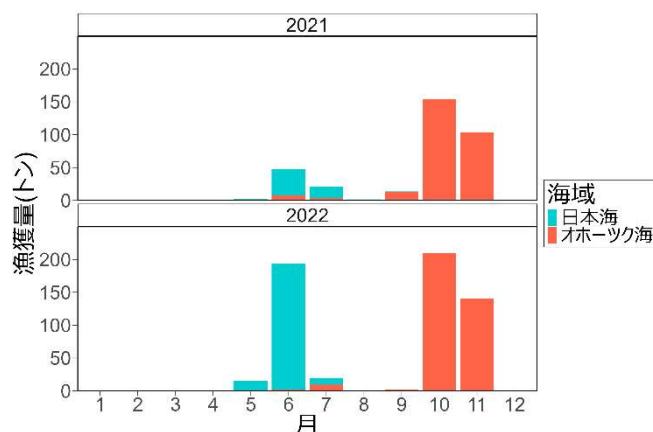


図3 日本海およびオホーツク海のマフグの月別漁獲量推移（2021～2022年）

○これからの調査について

北海道で急増したフグはマフグと推測されましたが、マフグに関する研究は全国的に少なく、成長や回遊などの基礎的な知見は不足しています。山口県水産研究センターの2023年の調査報告によると山口県沖で標識をつけて放流したマフグが北海道や岩手県で再捕獲されており、複数の海域をまたいで広範囲を回遊していると推測されています。前述した日本海の漁獲量の年変動やオホーツク海の冬の漁獲急減の原因はこのような広範囲の移動による可能性があるため、北海道周辺におけるマフグの季節的な移動回遊などについて調査を進めています。